HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 働く母親の学習課題と機会をめぐる一考察 |
| Author(s) | 丸山, 美貴子 |
| Citation | 社会教育研究, 36, 15-22 |
| Issue Date | 2018-06-28 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/71094 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 020-0913-0373-36.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 働く母親の学習課題と機会をめぐる一考察

丸　山　美貴子*

目　　次

１．問題意識と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
（1）問題関心・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
（2）保育学と子育て支援をめぐって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
２．保育者と親の関係性に着目した研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
３．親の保育実践への参加による学びに着目した研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
（1）親の成長支援としての考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
（2）子ども・親・保育者の三者の相互作用としての「保育参加」分析・・・・・・・・・・ 18
４．親と保育者の協同的な学びに着目した研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
（1）ロゴフの発達観を用いた親と保育者の協同的な学びの分析・・・・・・・・・・・・・ 19
（2）「共同」の思想を基盤とした保育の構造化 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
５．考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
（1）学習課題に関わって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
（2）学習機会に関わって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
（3）保育者と親の関係性に関わって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

## １．問題意識と目的

### （1）問題関心

「女性活用」政策と相まって、子どもを生んでも仕事を辞め専業主婦になることなく、働き続ける選択をする女性が増えている。

働きながら子育てをするという選択は、女性労働をとりまく社会的状況、家庭における男女の位置、子育てにおける母親の役割という各テーマを切り離さず関連性のなかで考えるという必要を迫る。換言すれば、育児期の有職女性には、女性としての行き方を問い直す学習必要が生じているように思われる。その学習必要は主体から切り離され外在化されたままであり、日常意識では悩みやしんどさとなって表面化するだけである。そして、何らかのライフイベントや家族の危機に直面したとき、再考

* 教育学研究院・助手

を迫る課題として立ち現れるのである。その課題を読み解いていくには、個々の家族に閉じることのない母親どうしの連帯関係の形成が必要であろう。

しかし、働く母親がつながれないという問題状況が様々に報告されている。2005 年には、50 年の歴史がある「働く母親の会」が活動を休止した。働く母親のあまりにもつらい現実に対し、会として助け合いのかたちやテーマが簡単には見いだせないという理由であった。これは、働く母親にも労働社会の論理がストレートに反映していることの現れではないだろうか。時間の余裕が全くなくなったという物理的問題も一つの要因だが、もう一つ着目すべき要因は、「わらをもつかむようにして会に入会してくるが、役に立つ情報やなにかしてもらえることを期待し、それが満たされないとわかるとやめていく」[1]という現象だ。子育て社会においては「無償性」「水平性」という異なる論理で構成されているものだが、労働社会でのしんどさを抱えた母親たちの助け合いや協同の活動にも労働社会の「効率性」や「合理性」という経済論理が浸食していることの現れとはいえないだろうか。

しかしながら、客観的には、現代の子育ては核家族だけでは行えない営みであるのが現実である。現代の家族は「地域から孤立した家族」であり、親たちに「孤独な子育て」によるストレスを抱えさせる。加えて一世代前からの親たちは、他者との葛藤や衝突をくぐり協同経験を得て人間関係を築く能力を獲得する機会を経てこなかった世代である。若い親世代は、生まれた我が子に直面して初めて、逃げることのできない「自分と子ども」という人間関係を目の前に突きつけられる。逃げ場のない密室状況が子育ての困難状況を作り出す。この困難を乗り越えるには、育児期の親どうしの連帯が不可欠である。

このような現代的問題状況にありながら、働く母親の労働と子育てをめぐる協同や学習がどのように展開しうるのか、その課題に関わり先行研究の検討を行うことが小論の問題関心である。

### (2) 保育学と子育て支援をめぐって

多くの育児期の有職女性が、最も密接に関わる施設は保育園や幼稚園であろう。とりわけ、保育園は子どもが長時間生活し育つ場であるため、保育者との関わりは欠かせない。また、子どもが集団で育つうえでは、親や保護者（以下、親とまとめる）どうしのコミュニケーションも必要である。働く母親にとって、助け合いの場、子育ての悩みや問題を考え学ぶ場として、保育園は大きな位置を占めている。

日本保育学会では、2014 年に学会紀要『保育学研究』において「子育て支援」を特集テーマとしている。その「総説」において、諏訪きぬは、「子育て支援」と称した研究の流れを「『子育て支援』＝母親の子育て支援という構図であり、しかも基本的には専業主婦の子育て支援」フィールドでの研究が大半であったと指摘している[2]。社会教育における子育て問題学習をめぐっても、同様の傾向であったことは否めないのではないか。

しかし、「子育て支援」というテーマでなくとも、保育園や幼稚園、こども園での保護者と保育者

の関わりとその意味や保護者の学びを分析した研究も試みられている。

そこで、本報告では、幼稚園・保育園を対象とした研究において、①保育者の親への関わりに着目した研究、②親の保育実践への参加が学びをもたらした研究、③親と保育者の協同的な学びに着目した研究、という三つの研究から、育児期の女性の学習課題と機会がどのように考えられるのかについて検討を試みたい。

## ２．保育者と親の関係性に着目した研究

まず、保育者の親への関わりに着目した研究について言及する。

今井[3]は、「母親をする」すなわち子育てのプロセスにとって、保育者との関わりがどのような意味があるかをインタビューによって分析した。第一には、子育てのパートナーの出現というソーシャルサポートを得るという意味である。第二に、それまで主なソーシャライザー（＝社会化の担い手）として認識されていた自己を解体し、家庭外のソーシャライザーとすみわけながら子どもを社会化する「自分」を再構築しているとする。しかし、この分析は、幼稚園入園直後の母親へのインタビューをもとにしており、保育者と親の関係は多分に予定調和的である。須永[4]の研究では、保育者と保護者のすれ違いが間々あることに言及しており、パートナー関係には「指導する―される」という非対称性があることを示唆している。

須永は同研究で、佐伯[5]の「発達のドーナッツ」論に依拠し、親の保育指導においては、保育者が親の「YOU 的他者」になることが重要であると指摘している。YOU 的他者とは、「その人の身になってくれる人、その人のことを親しく思ってくれる人のこと」を指す。そのような YOU 的他者との関わりを通して、文化的実践の世界（THEY 世界）で生きるようになるという（佐伯,2007）。保育者に即して述べれば、親の置かれている状況や抱いている思いをありのままに受容し、共感的に関わり、親を保育の営みの一員として受け入れる存在になるということである。このような関係が構築されることによって、子どもの理解や援助の仕方などを学ぶことができるという。

共感的な関わりという点では、衛藤[6]の研究も参考になる。衛藤は、保育者の経験年数による親との関係の捉え方の違いを分析し、経験年数を重ねることで、共感的にアプローチができるよう相手への捉え方が移行すると結論づけている。その共感に必要なのは、親を客観視できるようになり、親が抱えている生活・労働の困難や子育ての悩み、不安に問題を焦点化できるようになることである。親本人を問題とするのではなく、親の抱えている困難や状況、葛藤や不安などに問題に移行することで、親を支援しつつ協働してともに問題を解決していく関わりができるようになるという。

親と保育者との日々の相談や対話、連絡帳、おたより、個人懇談、クラス懇談など、親と保育者が子どもやクラスの様子を伝え合い、話し合う機会は多い。これらの場面だけで、親と保育者とによる学びが成立するわけではないが、親と保育者のどのような関係が協同的な学びを生み出す基盤となる

かという点で、一定の見解を示していると思われる。

## ３．親の保育実践への参加による学びに着目した研究

次に、親が保育実践に参加することによる学びを分析している研究について検討する。多く見られるのは、幼稚園や保育園の「保育参加」への着目である。近年、保育施設における「保育参加」が、子育て支援策の一環として親の育児不安の解消や、保育者との信頼関係の構築の観点から着目されている。

「保育参加」の取り組みの特徴として、第一に、「保育参観」と比べて親の保育への関与が高いこと、第二に、保育園や保護者会組織よる啓発のための学習会などと比較すると、親への一方向への教授ではない参加型の活動であり、親が比較的自律的な活動を撮ることができる、などの点があげられる。

### (1) 親の成長支援としての考察

橋本は、幼稚園における保育参加経験後の感想文の分析を行った結果、保育参加がわが子や様々な子どもの姿を理解することだけでなく、保育の理解や自分自身の振り返りにまでもつながっているとまとめている[7]。

宮本と藤崎は、父親が保育参加を経験した後の懇談会の語りを分析し、「子ども」「園」「自分」「妻」という四つについて思考していると分析している。保育参加によって、他児の様子を知ることが子どもの育ちについての見方を広げ、自分の子どもの姿の見直しにもつながっていること、保育園への信頼や保育への関心につながっていることの指摘は橋本と同様である[8]。加えて、父親に特徴的なのは、保育参加が妻への感謝を認識する機会となっていること、自分に関することとして、仕事への意欲の高まりを述べていることである。

### (2) 子ども・親・保育者の三者の相互作用としての「保育参加」分析

以上の橋本や宮本・藤崎の研究に対し、島津の研究は、親の成長支援という観点にとどまらず、保育者の認識の変容と子どもへの影響についても検討を行い、親・保育者の双方が子どもへの理解を深めながら、子どもを共に育てるという認識を醸成していることを明らかにした点が特徴的である[9]。同時に、子ども・親・保育者の相互作用として関係論的に捉え、レイブとウェンガー（Lave & Wenger）が提唱した正統的周辺参加理論を用い、「保育参加」を、通常は子どもと保育者により構成されている保育の実践共同体へ親が参入し、その参加が十全的になっていく過程において戸惑いや葛藤が生じ、それらが協同的な学びの契機となりうること、同時に保育の実践共同体の変容や保育の質の向上の可能性も有することを示唆している。

しかし、実践的には、「保育参加」の感想を研究者が聞き取って終わっており、その意味では個人の内にあるモノローグにとどまっている。例えば、事例では「物の取り合いになった時に、見守ったり声を掛けたりするタイミングが難しいと感じた」という記述があるように、問題提起となりうるような気づきが示されている。この葛藤は、子どもの発達段階への理解やどのような保育者や親の関わりが必要なのかという議論や学び合い、保育への理解に発展する可能性を有している。そのような「協同的な学び」を現実化しうるには異なる条件や関係性の深化が必要である。その可能性を示唆しているのが、次の研究であるといえる。

## ４．親と保育者の協同的な学びに着目した研究

### (1) ロゴフの発達観を用いた親と保育者の協同的な学びの分析

島津は、ある幼稚園の保護者会が再編される過程を、ロゴフの発達観を理論枠組みとして用い、親と保育者の協同的な学びの全体像を明らかにしようとした[10]。ロゴフは、「人間は、自らの属するコミュニティの社会文化的活動への参加のしかたの変容を通して発達」[11]すると言う。保護者会の再編は、保育という社会文化活動への親や保育者の参加の仕方の変容を様々な形で引き起こした。保護者会は運営メンバーと保護者会に深く関わらない親という参加の違いを生み出し、保護者会の位置も、子どもを中心として、園、園庭・園舎、周辺環境、保育者が配置され、さらにそれを囲む第三層に保護者が位置づけられることになった。このような保護者会の再編過程では、親と保育者間において、それまで表面化しなかった保育理念の捉え方の違いや子育て観の違いが表面化し、葛藤が生じ、保育や子育て、組織のあり方も含めて本質的な問い直しがあったとされている。

しかし、保護者会や保育実践への参加の仕方の変化に分析の主眼があるため、親と保育者の協同的な学びのプロセスは、具体的に分析されていない。保護者会再編の過程は、保育者と親、親どうしの対立の連続的過程であり、葛藤解決の不断の過程であったであろう。保育や子育てには自分の生き方が投影されるため、葛藤は他者との関係だけでなく、自己の内部にも生じるであろう。葛藤に直面して自分の限界を知り、他者とともにそれを乗り越える経験をへて、私たちの保育観、子育て観、子ども観などを共有する新しい自己が形成されるのではないか。それこそが協同的な学びではないだろうか。その分析が不可欠であると考える。

### (2)「共同」の思想を基盤とした保育の構造化

保育学分野の研究ではないが、保育所における親と保育者の協同的学びの研究として、アトム共同保育所の実践研究を検討に加えたい。東内は、アトム共同保育所の実践の歴史から、子どもの生活課題のつかみづらさを克服するため、アトム共同保育所における「共同学習」（生活記録と話し合い学習）が生まれたとする[12]。高度経済成長期以降、親の労働形態や生活が多様化し、若い親世代の感覚

の問題も現れ、また、母親も子どもの問題の責任を自分の能力不足に帰し、不安や悩みを他人に打ち明けられず苦しむという現状に直面した。アトムは、その状況を逆手にとり、一人ひとりの親が抱える生活の困難さを具体的に伝え合うこと、互いの生活における子育ての状況を伝え合うことによって、子どもの生活課題を確実につかもうとしてきたのである。

この「共同学習」では、子ども・保育を通して、保育者も自分の内面を映し出す作業が行われる。親も自身や子どもの生活状況や本音をさらけ出す「共同学習」を行う。各自の育ちの違いや生活意識・価値観の違いまで自己紹介を重ねていく作業で、はじめて自分と違う他者が理解できて、他者の良き理解者になっていくという。この繰り返しのもと、子どもの生活課題や発達課題を的確に把握した保育内容を展開していく。このプロセスが親の子育て主体としての自覚化をうながし、保育者の子ども理解を促すと東内は述べる。ここに、親と保育者の協同の学びがみられるであろう。

親と保育者の協同的な学びの研究として、島津と東内をとりあげたが、協同的な学びの分析の違いが理論的枠組みの違いによるものであるのか、または実践の質の違いによるものであるのか、研究事例が少なく十分検討できなかった。さらなる検討が必要である。

## ５．考察

まず、述べておかなければならないのは、育児期の有職女性にとっては、労働、性別役割分業、子育てなど複合的な学習必要が考えられるが、本報告では、保育学研究の分析に限定したため、子育てに関わる学習に限定されていることを断っておきたい。換言すれば、保育実践研究では、母親への子育てに関する学びが主として取り上げられ、それは女性としての生き方を問い直すような学習とは連続して捉えられていないということである。

### (1) 学習課題に関わって

小論でとりあげた事例研究では、学びの内容が、わが子や様々な子どもの姿を理解する、保育への理解や関心など、表面的、羅列的な分析にとどまっているのが現状であるように思われる。

しかし、実践の中では学びを深化しうるような契機が見られる。例えば、「保育参加」の事例において、「子どもどうしのケンカにどう関わったら良いのか」という葛藤が見られたように、この疑問を共有することで、子どもの発達課題や子どもが必要としている保育者・親の関わりとは何かへと学びが発展していく可能性は十分有していると思われる。保護者会再編の事例においても、「子どもの主体性を育てる」という保育理念を、保育にいかに具体化するかで、保育者と親の対立・葛藤が起きている。具体的には、年長時の「なつのおもいでかい」に例年は親が食料の買い出し、調理など手伝いに入っていたのだが、保育者は、保護者の参加の仕方が子どもの主体性の発揮を妨げると捉えていた。実際には、子どもたちの企画による会は、子どもたちが発案・交渉したり、民主制や公平性、根

気強さを発揮する機会となった。保育実践の前でも後でも良いだろうが、子どもの発達課題との関係で「子どもの主体性をいかに育てるか」そのための保育者と親の関わりを考えるという学びの深化の可能性はあったのではないだろうか。

一方で、アトムの事例研究は突出している。親が生活や労働の困難さ、親自身や子どもの生活状況、弱さをさらけだすことを通して、子どもの生活課題・発達課題を的確につかもうとする。その課題を援助するため、保育園と家庭で何を取り組むかが、親と保育者で共に考えられるのである。

子どもの生活課題・発達課題の直視は、子どもが自己の基盤をつくる幼児期をどう保障するのかという大テーマとつながっている。子どもの生活環境・生活スタイル、子ども集団の有り様、情報化社会の影響、早期教育の圧力、商品・サービスの反乱など、子どもが健やかに育つ地域社会をどう作るのかという点も学習内容の延長にある。ただし、それは多くの実践で学習必要に留まっていて、学習課題として自分に引きつけて捉える段階には至っていない。

### (2) 学習機会に関わって

東内は、アトム共同保育所の「共同学習」を分析した際、その実践内容を①生活記録（日報、連絡帳、クラス便りなど)、②話し合い学習（懇談会)、職員会議、運営委員会とまとめた。加えて、今回の研究分析で、日常的な保育者と親との関わり（対話や相談）も学びの導入として位置付く可能性を有するし、「保育参加」という参加や体験を通して気づくことが学習の契機となる可能性が示唆された。

ただし、問題は各々の機会での気づきをモノローグにとどめず、話し合いや対話へと深化させていくかどうかである。換言すれば、それぞれの機会をどのように関連づけ、学習へと構造化していくかという課題である。これは、保育園側が親に何を学んで考えて欲しいか、それは保育の質の向上に有効だと考えるか、家庭での子育ても共に考えようとするかという姿勢とも関連しているように思われる

### (3) 保育者と親の関係性に関わって

本報告の研究分析において、保育者が「YOU 的他者」になることの必要性が提起されていた。このことは、アトムの実践においても、月一回発行している通信に「保育士がどんなことで悩んでいるか、どんなことで苦しんでいるか、家庭事情を含めて保育士の自己紹介を繰り返し書いている」[13]ことと共通する点を持っているのではないか。保育者が弱さも悩みも迷いもある自分を包み隠さず語る文章を載せることによって、親は「アトムには悩みを聞いてくれる雰囲気がある」と実感するのである。もし、親が悩みを話すことができたらなら、その保育者は「YOU 的他者」になり得る可能性を持つことになる。これらのように「指導する―される」という非対称的性から脱し、保育者が親の学びに伴走する存在になることの大切さが指摘されていたと言える。

一方で、「親と保育者の協同の学び」という研究も見られた。この課題を考える際、保育者と親の違いを押さえておく必要があると思われる。子どもと保育者で構成される保育実践共同体においては、親は周辺に位置付く存在である。島津の研究[14]のように、その存在にも意味がある。しかし、子どもは保育園だけで育つ存在ではなく、常にその子どもがおかれている家庭や地域での生活とのつながりの中にあり、その中でも育つ存在である[15]。その意味で、保育者と親は異なる役割を持ちつつも、子どもの育ちに中心的に関わるという点で協同しうる可能性があるのではないか、このことは検討課題である。

1　萩原久美子(2006)『迷走する両立支援―いま、子どもをもって働くということ』太郎二郎社エディタス、p.291。
2　日本保育学会編『保育学研究』第 52 巻第 3 号、2014 年、p.4。
3　今井麻美（2014）「子どもの幼稚園入園に伴い母親が保育者と関わることの意味」『保育学研究』第 52 巻第 2 号、pp.124-134。
4　須永美紀（2010）「保護者支援に求められる保護者と保育者の関係性」『立教女学院短期大学紀要』第 42 号。
5　佐伯胖（2007）「人間発達の軸としての共感」佐伯胖編『共感―育ちあう保育のなかで―』ミネルヴァ書房、pp.1-38。
6　衛藤真規（2015）「保護者との関係に関する保育者の語りの分析―経験年数による保護者との関係の捉え方の違いに着目して―」第 53 巻第 2 号、pp.84-95。
7　橋本祐子（2008）「幼稚園における保護者の保育参加に関する一考察―「先生」として参加した保護者の感想文の内容分析より―」『聖和大学論集』36、pp.165-173。
8　宮本知子、藤崎春代（2015）「保育参加後における父親の語りの縦断的研究―父親が子どもの園生活に関わることによる視野の広がり―」『保育学研究』第 53 巻第 2 号、pp.96-107。
9　島津礼子（2014）「幼稚園の『保育参加』における学びの生成について」『保育学研究』第 53 巻第 3 号、pp.34-44。
10　島津礼子（2016）「保護者と保育者の協同的な学び―認定こども園における保護者会の事例から―」『保育学研究』第 54 巻第 3 号、pp.32-42。
11　バーバラ・ロゴフ、當眞千賀子訳（2006）『文化的営みとしての発達―個人、世代、コミュニティ―』新曜社、p.11。
12　東内瑠里子（2005）「保育における『共同』の思想と保育内容の展開―アトム共同保育園を事例として―」『九州大学大学院教育学コース院生論文集』第 5 号、pp.73-87。
13　東内瑠里子「子育て支援における『共同学習』の成立の条件と展開『九州教育学会研究紀要』第 28 巻、pp.66。
14　前掲 9
15　高嶋景子（2007）「『対話』が支える子ども・保護者・保育者の育ち合い―多様な他者が共に育ち合う多声的な『場』」佐伯胖編『共感–育ちあう保育のなかで―』ミネルヴァ書房、pp.155-156。